第 21 章 エミリー

最初，私は圧倒されてしまうと思ったが，私には，妻という頼もしい強靭な主塔，たいへん機転がきき，とても思慮深く助言してくれる女性がいた。

ワシントン・ローブリング

彼女（図-21.1[1]）は，ハドソンバレーの上流で生まれ，結婚するまで，そこで過ごした。その川は，単に風景が素晴らしいだけでなく，全ての人々の生活手段の中心であった。潮流や冬の異常凍結，春の解氷などの話題は，彼女の記憶の中で忘れられない日常会話の一部であった。

図-21.1 エミリー・ローブリング（1843～1903）

コールドスプリングにある町の船着場は，メインストリートの起点であった。ニューヨークからの上ってくる蒸気船メアリー・パウエル号やエミリン号が停泊する夏の時期，そこには，常にものすごい賑わいがあった。そして，夜になると，子供の頃の彼女の寝室で，大きな外輪船の汽笛がハイランズの中を通って次第に小さくなっていくのが聞こえた。

彼女が育ったハドソンのその地域は，15 マイル（24km）ほどにわたって，樹木がおい茂った山を深い峡谷が切り裂いており，渓谷全体のなかでも絵のように美しい有名な場所であった。彼女は今でも，その川の一部，たいへん幅広い鉛灰色の川の最後の部分が，マンハッタンの先端の向こうでアッパー湾に注いでいるのを，眺めることができた。また今でも，その当時のように窓辺に立って，午後の太陽が沈み，川の向こうに灯りがともるのを眺めることができた。ここの日没より，周りを全て山で囲まれたコールドスプリングのほうが早く，夕方の空はここほど壮観ではなかった。そして対岸のウェストポイントだけからの灯りは僅かであった。そうは言っても，ここは，彼女が生まれ育った場所と同じように，十分にくつろげる場所であった。

彼らの住宅は，ハイツで最良の場所に立っていた。その住宅は，高く堂々と広々しており，ギリシャ復興様式で南北戦争前に建造されたものであった。そして，コロンビアハイツの北端で，河川に沿った通りがあり，橋梁から半マイル（0.8km）の位置にあった。住所は，コロンビアハイツ 110 番で，パイナップル通りとオレンジ通りの間で，コロンビアハイツ通りの西側で，見晴らしのよい側であった。そちら側のほとんど全ての住宅と同じように，その住宅の裏側には，崖のふちの下側に建てられた馬車置き場と厩舎の天端まで広がる奥行きのある庭があり，その庭は波止場の傍のファーマン通りに面していた。出版業者でプリマス教会の中心人物であったモーゼ・ビーチが，隣に住んでいた。ヘンリー・ボーエンというビーチャー疑惑を煽動するよういろいろ動き，彼の亡くなった妻が有名な神学者のビッチャーの愛人であったといわれた人物は，ちょう

[1] Smithsonian Institution, Division of Mechanical and Civil Engineering

ど通りを上がった二階建てのコリント式柱廊玄関のある素晴らしい白い大邸宅に住んでいた。そして，ビッチャー自身も隣の街区に住んでいた。

彼女の家の前窓から通りを見渡すと，ジョン・ローブリングがしばしば訪れた古いトルコ風呂や，通りを真直ぐ横切ったところには，彼女が大好きな美しいアーチ型の玄関と長くて磨かれた厚板ガラス窓のある 3 階建ての煉瓦造りの住宅が並んでいた。それらの住宅は，煉瓦製歩道に直接面しており，彼女の住宅と同じように，その通りにほどよく調和し，整然とした外観を創りだしていた。太陽がピンクの煉瓦壁に木影を写しだし，ひとつの中庭の中のように，あらゆるものがきちんと閉まり人目につかないように見えた。しかし，自宅の裏側からは，どの階の大きな出窓からも港・河川・橋梁の全景や対岸の都市が，彼女の目の前に拡がっていた。

6 年間ずっと，ここが，彼女の世界の中心であった。彼女は性格的には出不精ではなく，夫と違い自由に動き回ることができたが，彼女が行動する時は，ほとんどいつも夫のためであった。そして夫のために，夫婦のこの場所を，他人に邪魔されず，台風の目のようにまったく穏やかになるように，できる限りのことを行っていたようである。

当時，彼女は 35 才であった。結婚して 14 年経っていた。そのうちの 10 年近く，夫はその橋梁で働いており，その間の半分以上は病気の身で，長い間，死と隣り合わせで，いつも彼女をとても頼りにしていた。

その時点で彼らの息子は，ほぼ若者になっていた。しばらく前から，どうやら彼女は，もうこれ以上子供は授からないと分かっていたようである。彼女は，ドイツで息子が生まれる少し前に，ひどく転倒し，その後，ミュールハウゼンの小さな宿屋で 1 ヵ月間近く出血が続いていた。夫は，次から次へとドイツ人の医者を呼んでいた。大西洋を渡る帰りの旅は，苦痛の日々であった。しかし，彼女は，自分が担ったあらゆることにもかかわらず，それ以来，ほぼ完全な健康を保っていたようである。そして，彼女に会った誰もが，とても印象深く感じたようである。

ある新聞記事には「ローブリング夫人は，背が高くて顔立ちの整った女性であり，イギリス風の素晴らしい上品さがあり，顔立ちだけでなく，上品な立ち居ふるまいには，貴族的な家柄が感じられる」と掲載されている。彼女は，珍しい婦人乗馬者で，“科学的な天性”があり，多くの話題に関して明確な意見が言える女性と見られていた。

彼女の身体的特徴を最もよく示したもののひとつに，ワシントン・ローブリングが戦争中に彼の妹のエルバイラ宛に書いた手紙がある。

> 小さな［エミリーの］鉄板写真が，たまたまひどい映像になっておらず，その点で何ら問題がなければ，貴方にそれを送るつもりです。人の美しさというものは，顔立ちで

はなく，その顔つきが種々の感情・・・・等々を表そうとする様々な表情にあります。彼女は，濃褐色の目，僅かに獅子鼻で，魅力的な口と歯で，頬のえくぼはなく，ローラ[2]のような口元をしています。話はとても面白く，君も知っているように，とても素晴らしい人であり，私自身が気も狂わんばかりです。彼女の顔は少し大きめで，とても美しい肌色です。・・・

ローブリング（**図-21.2**[3]）は，エミリーがどんなに写真を撮ってみても，どの写真にも決して満足することはなかったようである。それら写真には，彼女の“立ち居ふるまいの独特な優美さ”の感じが表れていないからと，彼は言っていた。

図-21.2 ワシントン･ローブリング（1854 年撮影）

彼は,彼女に出会ってから6週間後にダイヤの指輪を購入し，ボルチモアを慌ただしく訪問した。そこには彼女が，義理の姉である将軍の妻と一緒に滞在していた。彼は，彼女とのことについて全く躊躇することなく，彼女の気持ちも同じであった。4月，彼女への“私の素敵なワシントン夫人へ”で始まる手紙で「当たり前ですが，貴方はとっても素敵で，貴方の存在がいつも私を楽しくさせ，貴方が傍にいるだけで，私には満足感が溢れてきます。何も語り合う必要はなく，まったく黙っていても，最も活気に満ちたおしゃべりと同じくらい，深く繋がっていました」と語りかけている。

彼女は，その後の戦争の間，彼宛に絶え間なく，彼女の暮らしの日々の詳しい話でいっぱいの長く愛情のこもった手紙を書き続けていた。しかし，彼は，その全ての手紙を読み終えると同時に破り捨て,貴方からの手紙を読むと離れていることが更に辛くなると,彼女に語りかけている。とはいえ，ローブリングが 1 年に満たない間に最前線から書いた 100 通以上の手紙を，彼女は全て保管していた。

彼女が読んだ手紙には「この満月も，私と一緒に楽しんでくれる人がいるだけで，楽しいものになるでしょう。実際に，私が貴方と一緒にいるだけで，その夜がどうあろうとまったく気にならないでしょう。私達 2 人のどちらのほうが恋煩いをしているのでしょうか。貴方の場合，以前はそのようなことは全くありえないと思っていたようなので，貴方に勝ちを譲りたいと思っています。我々が互いにどれほどの期間で飽きが来てしまうのか，言い換えれば，コールドスプリングス周辺で育った人々の間では新婚の期間とはどれくらいなのかを，最愛の人よ，貴方の友人たちに尋ねて，私に教えてくれませんか」とワルダネスの戦いの直前に書かれたバージニアからの手紙もあった。

彼は彼女に，自分が好きなことや犬のこと，天文学やイギリスの小説家であるサッカレーのこ

[2] ジョン・ローブリングには，長女ローラ，次女エルバイラ，三女ジョセフィーヌ，四女ハナ（幼くて死去）という 4 人の娘がいた。

[3] https://commons.wikimedia.org/wiki/File:WashingtonAugustusRoebling.jpg （参照 2016-07-20）

とを話した。また，グッシー・ラビールという名のトレントン娘のことを話し，貴方が私のキャンプを訪れてくれないと，その娘がキャンプに来てしまうと，やきもちをやかせるようなことも書いている。南北戦争の倦怠感や無益さについても話している。彼は，彼女のことを，大変多くの色々な呼び方をしていたようである。彼女に，“最愛のエミー”，“愛しいエマ”，“親愛なるエミリー”，“最愛の女性”，“親愛なる老婦人”，“魅力的なウォーレン嬢”，“私の愛する人”，“貴方”，“愛しいエミー”，“愛しくくつろげる人”，“私の特別に愛する人”，“私だけのエミリー”，“一番優しい恋人”と呼びかけていた。

彼は「親愛なるエミー，やはり，どうか私に愛とは何であるか教えてください。それは互いにキスをすること？　くすぐりあうこと？　抱き合うこと？　それとも他の何か？　それは“billy duxes”と書くこと？　テーブルの下で互いの向こう脛（ずね）を蹴り合うこと？　それは，向こう脛に違いないと，私は考えています」と尋ねている。

7 月，ローブリングは「今度の冬には，すごい泥棒を期待しておいてください。彼は，コールドスプリングで唯一の貴重なものを盗むつもりです。そして，盗んだものを識別できないように名前を替えて，発見されないようにするつもりです」と書いている。

その後，彼は「川が凍っているときでも，メアリー・パウエル号は運行しているのでしょうか？」と尋ねている。「私がコールドスプリングの貴方を訪ねる時，鉄道は遅すぎるので問題外として，愛の翼で飛んでゆくつもりです。私は，トロイに 4 年近く住んでおり，鉄道や船であちこちに実に何度も旅行したけれども，コールドスプリング以外のあらゆる場所を思い出すなんて，不思議ではないでしょうか。おそらく私は汽車で通過した時に，貴方が短いワンピースを着て，通り沿いで，フラフープで遊んでいるのを頻繁に見ていたに違いない」

その後すぐに，彼女はスタテン島に向かい，初めて彼の家族の何人か，妹のローラ，その夫であるミュールハウゼン出身のメスフェッセル氏やその子供たちに会った。その体験は，彼女にとってちょっとした冷水浴であり，彼はそれをすぐに知ってとても喜んだ。

> オランダ人の叔父達や従兄弟達など，皆を訪ねたことを書いた貴方の手紙は，とても面白かった。これからの貴方の人生が，オランダ風の環境のなかで培われることを当然のことと思い，貴方の心は落ち込んでしまったにちがいない。貴方の手紙は，悲しく忍従する気持ちを表した一通であり，貴方のワシントンでさえ，その大きさを相殺するほど十分な影響力をほとんど持っていないと思います。おそらく貴方の人生が，スタテン島のオランダ人住民の間で送る運命にあるならば，そうなるかもしれません。けれども，愛する貴方は，気を取り直すに違いありません。我々の家族全員が，母を除いて，君が望んでいるようなアメリカ的な暮らしをしています。また，母にはこれまで，そのような機会がなかったのです。その上，最愛の貴方は，やがて家族の環の中で主導権を握る一人となり，中心となっていくことを，忘れないでほしい。

その後，彼女は，自分が主導権を握るように期待された“家族の環”を見るために，初めてトレントンに向かう旅をした。その当時，彼の 2 人の弟達は，ワシントンがコールドスプリングに行く前に，彼女の招待でコールドスプリングに行ったことがあった。彼らは互いに面識があった。特に，フェルディナンドは彼女が大好きであり，少し度が過ぎるほどで，人が冗談と思うくらいの部分もあると，ローブリングはエミリー宛に書いている。

ワシントンは彼女に「ローブリング家の前途有望な 2 人が行ったとき，貴方が彼らを大切に扱い，誘惑や危険に巻き込まれないように期待しています。彼らの若々しい心は，コールドスプリングの君への訪問が，彼らが生きている限り，決して心から消え去ることのないような，まさにそのような段階にあります」と冗談を言っている。彼は自分が結婚式をあげる前に，彼女の家に何日くらい滞在すればよいかを知りたかった。彼は誰かにそれを調べて欲しかった。

「私は今でも，貴方が最初の夜には私自身の部屋に泊まると私に約束したことを，鮮明に記憶しています。でも，それに私が同意したかどうかを忘れてしまいました。どうでしたか？」

彼が休暇をとって，コールドスプリングにやって来たのは，天候が突然激しく荒々しくなった秋であった。彼女は，小型船用埠頭のちょうど裏側にある駅で彼を出迎えた、彼らは川から急こう配で登っているメインストリートを進んで行った。彼は軍服を着ており，これまでコールドスプリングでは誰も見たことのないような素敵なカップルであった。

小さい町では，誰もが彼女を知っていた。その郡では，ウォーレン家は広く知られた一族であった。彼女の祖父はジョン・ウォーレンといい，古いパットナム郡史によると「彼は，質素で実務的な農民であり，更なる栄誉を望むようなことはなかった。彼の純心さと正直さは本物であり，生活のあらゆる関係においても，隣人が不快と思うようなことは決して行わなかった・・・。子供達が彼の美徳を受け継いでいることは，良く知られている」。彼女の父シルバヌス・ウォーレンは，ジョンの 7 人の子供の一番下で，優秀で博識な人物であり，ワシントン・アービング[4]の親友であった。彼女の母は，結婚前はフィービー・リッキーといった。

晩年のジョンは，オールバニ・ポスト通り[5]に今でも残っている有名な居酒屋を営んでいた。その店は，蒸気船が川を往来し始めるまでは繁盛していたが，その頃のポスト通りは，もはや南北を結ぶ最速ルートではなかった。彼女の父も，大家族を経済的にしっかりと支え，有名なウェストポイント鋳造所に出資していた。そこは兵器工場で，コールドスプリングの唯一の産業で，川岸に建っていた。鋳物工場でのパロット砲の試験や，ウェストポイントから行き来する将校達とともに，南北戦争は，ほとんどの北部の人々を巻き込んだように，この当時のコールドスプリングの人々にも，全く無関係とは思われなかった。彼女が自分の机に座りワシントン宛に手紙を書いている時，しばしば遠くの方で大砲を撃つ音が聞こえた。鋳物工場の傍の作業場では，大砲に

[4] ワシントン・アービング（1783～1859 年）は，19 世紀前半のアメリカ合衆国の作家であり，“リップ・バン・ウィンクル”や“スリーピー・ホローの伝説”などの作品で知られるようになった。

[5] ハドソン川東岸に沿ってニューヨーク州の州都オールバニとニューヨークを結ぶ道路で郵便道路として利用されていた。現在は，国道 9 号線がその機能を担っている。

最大能力の砲弾が充填され，川の上流側のはるか向こうのストームキング山の岩肌に向かって，発射されていた。砲弾が当たった場所では，土と石の巨大な塊が打ち上げられ，その面の山肌がこの先何年も露出したままになるような印象があった。

けれども，家族のなかで最も注目すべき人物は，将軍で G.K.と呼ばれた彼女の兄（**図-21.3**[6]）であった。彼の通称は，ガバヌーア・ケンベルという鋳物工場を創業した博学で陽気なコールドスプリング出身の人物の名をとってつけられたものであった。ウォーレンには 12 人の子供がいたが，幼児期を越えて存命したのは 6 人だけであり，その中で G.K.が一番年長であった。彼は，エミリーより 14 歳近く年長であり，エミリーは下から 2 番目であった。彼女にとっての兄は，颯爽とした英雄的な人物以外の何物でもなかった。グラント政権の貴族のような国務長官で，近くのギャリソンに広大な田舎の屋敷を所有しているハミルトン・フィッシュを別にすれば，将軍ガバヌーア・ケンベル・ウォーレンは，パットナム郡で最も有名な市民であった。

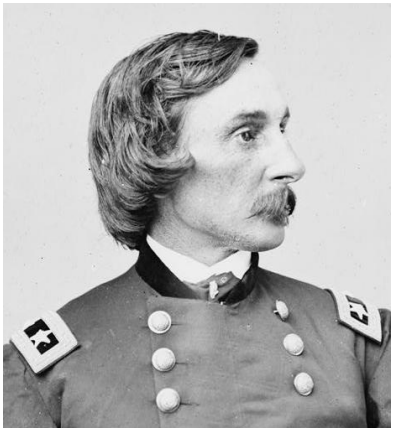

図-21.3 G. K. ウォーレン
（1830～1882）

彼がウェストポイント[7]を卒業した時は，ウォーレン家では重大な出来事であったが，エミリーは幼すぎて記憶になかった。彼が 16 才で士官学校に入学する時，ガバヌーア・ケンブルから「我々は，君が 2 番より低い成績で卒業することはないと期待している」と高尚な激励を受けた。そして，彼は，まさにそれを実行し，44 人のクラスで 2 番の成績で卒業した。その後 10 年間ほど，家に帰ることは極めて稀であった。最初は，ミシシッピデルタに赴任して治水事業に従事し，その後，西部に向かった。ハーニー将軍の下でスー族と戦い，ネブラスカ州と南北両ダコタ州の地図を作った。1859 年，彼が再び家に戻ってきたのは，ウェストポイントの数学の助教授になる時であった。彼は，最初のブラックヒルズ[8]の探検家で，細身で，黒髪で，ひどく日焼けした青年として知られており，口髭を除けば，彼自身がまるでインディアンのように見え，弟や妹達には，かなり風変わりな他の世界からやってきた人のように思われた。

彼を知っている多数の人々が後に語ったところでは，彼は兵士に対して，特に優しく，情け深かったようである。彼の発言によると，インディアンとの戦いで悲惨なことは，かなり頻繁に，女性や子供を撃ってしまうことであり，彼らの負傷を看護する時になって，彼らが他の女性や子供達と全く同じであることに気づくことであった。西部では，彼は“有能な中尉”として知られていた。

---

6 https://commons.wikimedia.org/wiki/File:GKWarren.jpg （参照 2016-07-21）

7 ニューヨーク州ウェストポイントにあるアメリカ合衆国の陸軍士官学校であり，その地名より，ウェストポイントと通称される。1802 年に設立されたアメリカ合衆国で最も古い士官学校であり，学校の設立以前は要塞があった。敷地面積は 65 平方キロ以上で，世界で最も広大な敷地を持つ学校の一つである。

8 ブラックヒルズは，サウスダコタ州とワイオミング州の州境にある山地であり，古くからインディアンが住み着いていた地域である。1874 年にカスター将軍がブラックヒルズで金鉱床を発見して，ゴールド・ラッシュが起こった。白人の探鉱者と，聖地ブラックヒルズを守るスー族との間で激しい戦いが繰り広げられた。

G・K・ウォーレンは，父親が亡くなった年に陸軍士官学校で教鞭をとり始め，弟達や妹達に対するほとんどの責任の引き受け，素晴らしい気遣いと誠実さで，彼らが興味を示すことや健康に気を配った。ちょうど 16 歳のエミリーに対しては弟以上に世話をやき，彼女の整然とした対処方法や，科学や特に植物学におけるその後の関心には，彼の影響が大きかったようである。その時代の多くの他の著名な兵士達と同様に，彼も花がたいへん好きであった。

また G・K・ウォーレンは，橋梁に特に関心を持っていた技術者でもあり，身体的な危険を恐れない人物であった。あらゆる種類の見せ掛けを明らかに軽蔑し，若い副官のローブリングのあらゆる資質を評価していた。そのようなことから，彼女も，第 2 回軍主催舞踏会での最初の出会いで，すぐに彼を意識するようになったに違いない。

ウォーレン家は，ハドソン川地方の尺度によれば裕福な人々ではないが，良い家柄とみなされていた。コールドスプリングは，芸術家や文人達の小規模だが優秀なグループの集まる場所であり，ワレン家の若い人々は，そのような社会の一員であった。かつて，南北戦争の間に，画家トーマス・R・ロシターは空想上の“ハドソン川でのピクニック”を描いた。その絵（図-21.4）は，いつかハドソンリバー学校での最もすばらしい作品のひとつと評価されるであろう。それは，おそらくコールドスプリングの上流社会の人々を象徴する肖像画であり，20 人の紳士淑女が，コールドスプリングの少し下流にあるコンスティテューション島に，ピクニック用のバスケットを持って集まった状況を描いたものである。彼らは，上品な夏の服装で着飾り，日光を浴びながら，遠くに帆船やストームキング島が見える大きな川の傍で，形式的にポーズをとっている。その集団の中には，年の割にはがっしり見えるガバヌーア・ケンブル，ハミルトン・フィッシュの娘で

図-21.4　ハドソン川でのピクニック（トーマス・R・ロシター作，1863）

あるジュリア・フィッシュ，大砲の発明者であるロバート・パロット，画家のロバート・ウィアー，年配で白髭のジョージ・ポープ・モリスというニューヨークのミラー誌の編集者で“あの木をいたわる木こり（Woodman, Spare That Tree）”の歌の作詞家が描かれている。中央の前側には，半身を横たえたポーズで，かなり固く照れくさそうにみえる G・K・ウォーレンがおり，彼の軍服のズボンが，絵の構図なかで，唯一の目立つ明るい赤色で描かれている。しかし，その左後ろ側に大きい花模様の麦藁帽をかぶった若い女性がおり，はっきりとは確認されていないが，おそらくエミリー・ウォーレンであろう。

コールドスプリングでの彼女の家族とローブリングとの初の出会いは，短時間で，明らかに順調に進んだ。ワシントンは，バージニアに戻ったすぐ後にエミリーに「僕たちは，ずっと一生，恋人同士でいられると思います」と手紙を書いている。

2 人は, 1865 年 1 月 18 日にメインストリートに面した小さな煉瓦造りの教会で結婚式を挙げた。その式は，彼女の兄で騎兵隊の陸軍少佐エドガー・ウォッシュバーン・ウォーレンとコールドスプリング出身のコーネリア・バロウズとの結婚式も行うという二重の式典であった。彼女とワシントンが結婚式を終えて扉から出てきたとき，彼女の家の外には寒い中で，かなりの群衆が集まっていた。そして後年，コールドスプリングの老婦人達は，まるでその状況に立ち会ったかのように，エミリー・ウォーレンが結婚式の日に階段を下りてくるのを，子供ながらに，どのように見ていたかを話したようである。

しかし, 1879 年 1 月でさえ, エミリーにとって, それら全てが遠い昔のことのように思われた。彼女の傷ついた夫は，絶え間ない激痛を訴えており，その苦しみには，仕事のひらめきに替わる不安感と，仕事に対する誇りの両方が，同時に影響していた。医者の言うことを信用した場合，その当時では，二人一緒に普通の生活を送ることは考えられなかった。

彼女は，自分の目の前で，身体だけでなく精神も全てが破滅して行く夫を見てきた。そして，彼女は，不思議にも彼女の最愛の兄にも，同じようなことが起ったことを，よく理解していた。

彼女が結婚してわずか数ヵ月後，ガバヌーア・K・ウォーレンの輝かしい軍歴は，南北戦争の最後の決戦であるファイブフォークスでの戦いで，不可解で悲劇的な思わぬ障害に陥った。戦争の重圧が，若い将軍に悪影響を及ぼし始めた。いつも些細なことを騒ぎたて，部下に任せるべきことに，ますます自らが没頭するようになっていった。彼は，全てのことを更に慎重に，グラント中将に比べるとかなり慎重に対処しており, 個人的には, この状況で容認されると考えていた。グラント中将はものすごく急いでおり，その時，ウォーレン少将が，北軍の大変有名な歩兵連隊のうちの第 5 軍団を指揮していた。グラント中将は，第 5 軍団とウォーレン少将を，騎兵で攻撃的なフィル・シェリダン少将の完全な指揮下に配置した。またグラント中将は，シェリダン少将に，適切と思えばウォーレン少将を解任するように指示した。グラント中将はこの理由について全く説明しておらず，今でも歴史家の間では，誰が正しく誰が間違っていたのか，結果に対して誰に責任があったのか，意見が異なっている。

ウォーレン少将は，進軍する経路について矛盾する命令を受けた後，彼の部下達を，真っ暗闇で，雨でぬかるむ土地を徹夜で行進させ，シェリダン少将の求める支援に向かったが，少し到着が遅れた。その日の午前中に実施するように計画された攻撃は，午後までに打ち切る必要があった。戦いが始まった時点で，ウォーレン少将は，シェリダン少将が要請した場所に，今回も到着していなかった。ウォーレン少将は全力を尽くしたが，シェリダン少将を十分に満足させることにはならなかった。シェリダン少将は激しく怒り，ウォーレン少将の指揮権を解任するよういきなり命令した。

ウォーレンの下士官達は，それが信じられずに激怒し，その後ずっと彼の名誉を守り続けた。その頃，既に軍を退役していたローブリングは，自分がそこにいれば，ウォーレンの状況は違っていたに違いないと，いつも感じていた。ローブリングとエミリーは，自分でも言っていたように 2 人とも“冷静な判断をする”性格であったが，このような特殊な問題については，実際に全く迷うことなく，片方の言い分しか聞かなかった。

ローブリングは憤慨して「シェリダン少将が防壁に腰を下ろして，南軍リー将軍の部隊に包囲されつつある自分と自分の騎兵隊を急いで助けるように，ウォーレン少将宛に 5 分毎に下士官を派遣している状況を想像してみてください。そして，ウォーレン少将が（氷で覆われたクリークを腰までつかり歩いて渡って）駆けつけ，シェリダン少将を救って戦いに勝利した時，そのような時に，シェリダン少将は彼の方に振り向き，罷免したのです」と書いたようである。

ファイブフォークスの戦いの後，ウォーレンはピーターズバーグ防衛の指揮を任された。その後，メンフィスに向かいミシシッピの部隊を指揮した。南北戦争の終結後，軍に残ることにして，ミシシッピ川上流で技術者として，ユニオン・パシフィック鉄道の調査委員会のメンバーの一人としても活躍した。また彼は，戦場となったゲティスバーグの測量を任された。そこは，彼と若い義理の弟が，栄光に包まれた日々を送った場所であった。

だが 1869 年，ローブリングがブルックリン側ケーソンの施工に着手した時，ウォーレンは，イリノイ州のロックアイランドで，ミシシッピ川を渡る橋梁建設を任されていた。その場所には南北戦争前まで，アブラハム・リンカーンが関与していた歴史的に有名な訴訟の論点となった初期の鉄道橋が架かっていた。1856 年に新蒸気船エフィー・アフトン号が，ロックアイランド橋の橋脚に衝突して燃え出して沈み，橋梁の一部を燃やした。その橋梁は，ロックアイランド鉄道が管理する大規模な木造トラス橋であり，大急ぎで修理されたが，蒸気船の関係者が告訴して裁判で争うことになった。リンカーンは鉄道を代表して「交通の東西の流れは，南北と流れと同様な利権を有している」と主張した。陪審がその告訴を棄却し，鉄道と橋梁に対して，またアメリカ商業の明らかな原型と成長が東西交通にあるという概念は，見事な勝利をもたらした。

だが新しいロックアイランド橋では，河川にも同様の利権を満たすこととなっていた。1869～1870 年にかけて，ウォーレンはその橋梁に関してとても一生懸命に働いた。その結果，健康を害

して，それ以降ずっと全く回復することはなかった。加えて彼は，ファイブフォークスの出来事での名誉を晴らすために苦労しており，その状況を検証するよう調査委員会に繰り返し要求していたが，取り上げられることはなかった。彼の職務は，決して減ることはなく，ミシシッピ河上流域・大西洋沿岸部・五大湖などで河川や港の工事を続けていた。イーズ橋の論争の間にはハンフリース審査委員会で活動し，まさに 1878 年 10 月には，ロードアイランドのハーバー委員会の諮問協議会に配属されていた。しかし，ロックアイランドでの過労と体調悪化，そして，彼の聴聞申請に対する政府の拒否が，彼を身体面でほとんど破壊しただけでなく，精神面でも消耗させていった。青白くて目の窪んだ彼は，48 歳というより 60 歳くらいに見えた。

ファイブフォークスの件に関して，ウォーレンの見解に関係している人物の 1 人が，その当時，首都ワシントンでの権力者（ユリシーズ・グラント大統領）であったということが問題であった。グラントは明らかに，ウォーレンの名誉を回復する以上のことを望んでいた。

ローブリングは「私は，ハンフリースや他の人々の発言で，グラント大統領がウォーレンの調査を認める方向に傾いていると聞いていたが，そのウォーレンは，シェリダンが卑怯で軍人らしくない行為を行ったことについて，正式に懲戒処分を受けるよう要求していた。グラントは，その二人のどちらを取るかの選択で，最終的にシェリダンを護った。その当時，グラントの評判は最高潮にあり，自分の好きなように処理することができた」と書いている。

ウォーレンにとって，自らの名誉回復はひとつの強迫観念になっていた。彼は，断固として敗北を認めることを拒否しており，その尽力は精神面や財政面だけでなく，他の面でも自らを犠牲にしていた。決して金持ちではなかった彼は，南北戦争でほとんど文無しになってしまった。彼の妹と義理の弟は，折にふれて，精神的な援助だけでなく金銭面での援助も，黙って行っていた。

エミリーにとって，彼女の人生で最も重要な男達が，そのようなとんでもない不幸の犠牲者となっているのを見ることは，胸がはり裂けそうなことであった。誇りと常識があり，古風な義務感を持った彼ら二人が，どういうわけか時代にそぐわず，それに対して凄まじい代償を払っていたように思われた。彼女の周りの至る所で，つまらない男達，狭い野心と安っぽい価値観を持った愚かで低俗で信頼できない男達が，今までになく成功し，権力や金，彼らが強く望んでいた他の何かを，ほぼ手に入れていた。マーク・トウェインが名づけた金ぴか時代（Gilded Age）は，そんな連中にぴったり合っているように思われた。政治的な賄賂や不正な契約，全ての面でのダブル・スタンダードが，とても華々しい絶頂期であった。古くからの真理は，もはや交渉の余地がないと思われた。名誉・尊厳・立場に対して妥当な主張を行い，少なくとも彼女が育った時代のあらゆる基準では立派で勇敢な男達が，なぜか邪魔にされ，脇に片付けられてしまった。

しかし彼女が，長い間そのような考えで悩んだり，落ち込んだりしたとしても，記録には，それを暗示するものは残っていない。そして，彼女がとても愛し，賞賛した男達と同じように，彼

女は降参することを，きっぱり拒否していた。さらに，時が経つにつれて，彼女はたくましくなり，徐々に橋梁の事に深い関心を示すようになってきた。

その後の彼女や，彼女が果たした役割について語られた各種の話があり，その多くは全く真実のようである。だが，数件の記事が示唆し当時の噂話になったように，彼女が密かに橋梁の技術者の後を継いだことはなかった。

しかし，そのような話が広まったことは，全く驚くことではない。エミリー・ウォーレン・ローブリングは，誰の目にも明らかなように，非凡な人物であった。そして，コロンビアハイツの自宅から橋梁事務所への全ての文書連絡は，彼女の手によるものだったので無理もない話だが，彼女が夫の口述した事を単に書き留める以上の事をしているという強い疑念が持たれていた。最初は，彼の英語を校正しているのは，単に彼女のおかげであると思われており，どうやらそれは本当だったかもしれない。だが，彼女の本心が，偉大な事業の後押しをしたいというものであり，時代の最も記念すべき工学面でのこのような大成功が，実は一人の女性が行ったという噂話が，しばらくして拡がった。一般的な判断として，そのようなことは荒唐無稽であり，不幸であるという両方の意見がほぼ 1/4 を占めていた。実はその頃には，彼女は，複雑な土木技術を十分に理解するまでになっていた。彼女は，物覚えが速くて素晴らしい記憶力があり，数学に対する天賦の才能があった。また，ワシントンに障害が出ていた長い間，勤勉な学生であった。

彼女の評判のよい風潮には，理事達から不満が出ていた。それに関して，新聞は遠回しの表現であった。そして，彼女がそのように重要とみなされているという事実は，ローブリングの頭が正常でないという議論の基本的根拠として頻繁に利用された。

ファリントンでさえ，ある程度は彼女の演出であると言われていた。ファリントンは，ブルックリン音楽ホールとクーパーユニオンで，橋梁に関して，大変人気のある幻燈用スライドを利用した講演を何度も行った（数千の人々が，有名な機械工長の話を見聞きするために集まっていた）。ニューヨークのスター新聞は「その河川事業について熟知した人々の間では，F 氏の原稿が有能な女性の手書きであり，その書式と筆跡はブルックリン橋梁事務所では既によく知られていると，ささやかれている」と論評している。多分これは事実であろう。いずれにせよ，とても多くの人々が，それは真実であり，重要な事であると理解していた。

また，彼女は，訪問客から自分の夫を護ることも大変上手になっており，多くの訪問客は，彼女がアシスタント技術者と同じくらい橋梁の技術面に関して熟知していることに，納得して帰って行った。橋梁事務所の職員や種々の請負者の代表が，ブルックリンのローブリング宅の訪問を許可すると言われた時でさえ，技師長が彼らを迎えることは滅多になかった。彼女は，彼に代わって面談を行って疑問点を尋ね，その相談事について完璧な信頼性のある具体的な指示を返した。彼らのほとんどは，彼女の夫が相談事の全てを間違いなく承知していることに，すっかり納得して帰って行った。しかし，結局は技師長に会い，その後の連絡は彼女宛に直接送ることで，納得して扉の外に出た人も若干はいたようである。

例えば，1879 年のある時，重要な請負人であるエッジ・ムーア製鉄会社の潔白について論争に発展した。見苦しい遠まわしの発言の応酬が，新聞紙上で繰り返され，まるで長期にわたる調査報告が更にあるように見え始めた。その会社は，技術部門の潔白と善意を保証するため，その効果に関する公式声明書を，技師長宛はなくワシントン・A・ローブリング夫人宛に送付した。そして，その手紙の内容には，彼女の夫の事や，その健康を気使ったり，彼の回答や意見を求めるような記載は，何もなかった。

ローブリングが“口述筆記者”と呼んでいた彼女の働きは，彼が後に語ったように，とても重要であった。彼女は，彼の全ての記録を残し，多くの彼宛の郵便物に返事を書き，橋梁事務所へ様々な伝言や要求を連絡し，自ら建設中の橋梁に出向き彼のために状況を確認し，たまの社会的式典では彼の代理を務めた。彼女は，まったく文字通り，彼の目であり，足であり，素晴らしい右腕であった。そして，彼女が活動すればするほど，陰口をたたかれた。

ニューヨークとブルックリンの 6 社分の新聞が，大きな煉瓦造りの家に，毎日定期的に配達された。ローブリングにとって，それらの新聞は，今でも橋梁と彼の周りの 4 枚の壁の向こうにある世界との，唯一の接点であった。彼のために，それらの新聞を声に出して読み上げる必要があった。彼の目は大いに回復していたが，一度に数分間以上読み続けることが難しかった。だから彼ら二人は，事務所・病室・指揮所を兼ねた 2 階の部屋で，一緒に座っていたようである。その場所での日々は，彼にとっては非常にゆっくりと過ぎて行った。その場所から彼女は，彼が話すように，橋梁が図面から具体化し成長していく状況を，毎週・毎月・毎年ずっと窓から眺め続けていた。

1878～1879 年の冬の間，新聞が橋梁に関する記事を掲載しない日は滅多になく，彼女は彼のために新聞を読み上げ終わった後，橋梁に関するどんな部分でも切り抜き，大きなスクラップブックにその記事を貼り付けていた。それは，彼女の兄が，戦争中に自らの軍事行動の全ての記事について行っていたように，手際よく整然としていた。

しかし，これらの切り抜き記事は，2 人が行ったことを知り，例の人々に感じていたことを理解するには，ほんの氷山の一角であったに違いない。この時期に，その部屋での 2 人の苦悶の年月について，書かれたものは何もない。その場所で取材訪問することを許されたジャーナリストや雑誌記者もいなかった。とても簡潔で事実に基づく文章以外に，2 人のどちらか一方が，その体験について書いたことはなかった。胸の内を明かすような回顧録もない。2 人のプライバシーは，完全にきっちりと護られていた。

ただ残存している信書控え帳には，2 人が自分たちの周りに築いたプライバシーの壁に若干の隙間が残っている。それは，技術的な詳細が記載されたページと上側のページに挟み込まれた感

情の短い突然の暴発であった。これらでさえ，やたらに判読しがたく，彼女が鉛筆で書いた行は何年も経過したことで，ひどく汚れたようになっている。だが，挫折感や身を切るような辛い憤り，表現されている激怒などは，いつも彼のものである。彼女が感じたことや，彼の平衡状態を維持し二人が落ち着くために彼女が発言したり行動したりしたことが，これらの信書控え帳から，わずかだが推測することができる。

ローブリングがトレントンから戻って以来，最悪の時期が，1879 年春の 5 月初旬に訪れた。それまで 1 ヵ月近くの間，まるで全ての事が，本来あるべき姿に戻って行くように思われた。会計監査官のジョン・ケリーは，彼のタマニー派の脅しにもかかわらず，法廷に引っぱりだされた。マーフィーは，架橋公社側の弁護人として，ウィリアム・M・エバーツを雇った。彼は有名で費用のかかるニューヨークの弁護士であり，弾劾裁判でのアンドリュー・ジョンソン大統領や不倫訴訟でのビーチャーの弁護を務めたこともあり，ちょうどその時は国務長官を務めていた。エバーツが論争した中心的な課題は，大規模な公共事業を，初期段階の一部の簿記が全く適正に行われていなかったという理由や，橋梁の下を通過するために僅かな船舶の二次的な高さ調整を避けるという理由で，中止すべきかどうかということであった。ヘンリー・マーフィーは，誰も驚かない説得力ある参考人であり，最初はニューヨークの連邦最高裁判所，その後は控訴裁判所の裁判官達が，橋梁に有利な判決を下した。「ニューヨーク市すなわち会計監査官ケリーは，橋梁事業の負担金の支払いを，これ以上遅らせることなく継続する」という判決が下った。ニューヨークのヘラルド新聞は「もちろんこれは，ブルックリンにとって大きな喜びである。橋梁の成功は間違いなく，6 ヵ月以上中断していた橋梁の建設作業は，数日以内に再開されるであろう」と伝えた。それは現実となった。600 人の作業員が取り付け道路の建設作業に戻り，ケーブル被覆作業が直ちに再開された。

また，いわゆるミラー訴訟，全体的に橋梁を除去するという訴訟も，やっとのことで解決した。ここでも大部分は，ヘンリー・マーフィーの疲れを知らない粘り強い努力の結果であった。通商と航海に関する州委員会が，ニューヨークのメトロポリタン・ホテルで公聴会を開催し，橋梁側の参考人として，マーフィー，ストラナハン，年配のジュリアス・アダムズ，C・C・マーティン，ペイン，マクナルティ，コリングウッドの全員が，順々に法廷に立った。反対勢力は，橋梁に対して不利な証言をするために，大勢の港内水先案内人や船長，造船技師，倉庫業者，数人の技術者などを集めた。倉庫業者である原告のエイブラハム・ミラーは「私は，橋梁が完成するとは思っていなかったので，この時期になるまで告訴を行わなかった」と述べた。彼は，両市がその橋梁で金を儲けることは失敗するであろうと確信していた。スタンダード・オイルの代表者は，橋梁建設によって，通商の流れがフィラデルフィアに向いてしまうだろうと警告した。一部の港内水先案内人は，数人の船長が述べたように，ケーブルがすでに十分な障害となっていると訴えた。聴取された全ての証言内容，提示された証拠類・図・表・統計値等のあらゆるものが印刷され，最終的に全てを一緒にすると，ちょうど 5 ポンド（2.3kg）の重さとなる量で，1 個の巨大なドアストッパーになるほどであった。だが，橋梁の反対者からの資料提供は，何もなかった。リンカーンのエフィー・アフトン号訴訟や，工兵科審査会に対するイーズの勝利と同様に，東西の交通手段が優先され，橋梁側が勝訴した。

だが 5 月になると，ローブリングにとって，これまでで最も卑しい痛手となるものが巡ってきた。彼は，橋梁に関して別の大きな変更を決断した。ローブリングは，ペインの報告書（特定の仕様による形状と品質を有する鋼材を生産する様々な製造会社の能力に関する報告書）を受領した後で，トラス構造で鉄材の替わりに鋼材を用いることを決断した。これは，その時点で実質的に橋梁が全鋼製となることを意味しており，理事会の承認を経て新規の入札公告を行った。スローカム将軍は，アシスタント技術者達（特にペインのことを指していると解釈された）が製鋼業者からの賄賂を受け取っていると，理事会で発表した。スローカムによると，その賄賂は種々の機会に受け取り，総額で 1 万ドルに達しているとのことであった。ローブリングのアシスタント達を除き，橋梁の件について本質的な発言をした大部分の人は，この頃までにあれこれと責められていた人達であった。今回は，彼らの番であった。スローカムの告発は，公式の記録には残されなかったが，2 日後，新聞はその話題を，理事達がその問題を議論するために 5 月 5 日に非公開会議を再び開催し，この時の理事達が新聞に発表した見解を含めて掲載した。

スローカムは「賄賂の話は，ブルックリンのクローム・スチール社のマーシャル・P・デービッドソンという男性から聞いた」と話している。「これらは明白な容疑であり，根拠のない噂ではないことを理解して頂きたい」と発言している。また彼は，ローブリング社との特定の取引に関して，若干の疑問があると述べた。「そして私がまさしくこの場で発言したいことは，我々に材料を供給することに技師長の弟達が携わっていることが下品なことであると，私が考えているということである」

興味深いことに，ウィリアム・キングズレーがこの時に立ち上がり，スローカムの目を見ながら「“その場に不在で反論ができない人々”に関係するそのような説明を聞くことは残念である」と発言した。さらに，キングズレーは「信用と商取引での誠実さの評判で，ジョン・A・ローブリングズ・サンズ社を上回るような会社は，国内には存在しない」と述べた。

それでもなお，それらの嫌疑を調査するための特別委員会が設立された。この委員会は，翌日の午前中に会合を開き，デービッドソンから直接話を聞き，トレントンからやってきたフェルディナンド・ローブリングの話に耳を傾けた。デービッドソンは，スローカムが自分の話を間違って引用していると述べた。彼は，技術者に関してそのような発言をしたことはなかった。彼は「私が発言したことは，賄賂の噂があるが，自分自身はそのような噂は信じていないということである」と確信していた。

フェルディナンド・ローブリングは「自分の役割に関して，その問題を法律家の手に委ね，“何者か”に対して名誉棄損の訴訟を開始すべき時期が来たと思っている。ローブリング社がずっと我慢してきた暴言に関しては，限界に達してしまった」と述べた。ローブリング一族と橋梁との関係は，決して有益なものではなかったことを，彼は理事達に再認識させた。父親は命を落とし，兄は健康を犠牲にし，家族の評判は執拗に攻め立てられてきた。また，ローブリング社では，原価で残りの素線を生産するだけで満足しており，架橋公社との契約で収益を上げることに固執し

ていないようであった。

フェルディナンドはブルックリン滞在中，ほぼ確実に兄の家で，ある程度の時間を過ごしており，ヘンリー・マーフィーが，かなり頻繁にローブリング宅の玄関を出入りしていたようである。エミリー・ローブリングが我慢する必要があった興奮の度合いは，ワシントン・ローブリングからスローカム将軍宛の以下の手紙から評価することができる。なお，この手紙は，フェルディナンドが委員会に召喚された日に口述されたものである。

私が技師長在籍中，弟達に橋梁に関係する何らかの仕事を行うように許可していることは下品であると，貴方が考えていることを度々繰り返して発言することは，最後にして頂きたいと思います。弟達は，私に相談せず私と無関係に行動しており，橋梁の契約に彼らを応札させたくないと私が思ったとしても，彼らを抑えることができないと，考えておられるのでしょうか。あるいは，ジョン・A・ローブリングズ・サンズ社がワイヤーロープの製造で，この国では一流の会社であることを，考えられたことはおありでしょうか。貴理事会では，“不正”という言葉は，そのような名声の保持とは全く無関係なのでしょうか。1 人の技術者としての私の信用は，私と同様に，アシスタント技術者や弟達にとっても大切なことであり，私が必要な管理や技術を認識している仕事をする際に，不正を何度も繰り返して見つけられた後でも契約継続を許されている資本も信用も無い一部の卑劣な請負者より，むしろ彼らに任せた方が，私が更に満足感を感じることは，少なくとも当たり前のことではないでしょうか。

貴方は，あのような方法で問題を取り上げる前には，デービッドソン氏の真意をとても確信しておられたはずです。そして，もし貴方が本当に真実を知りたいと望んでおられるのであれば，貴方が誤解したような彼の単純な断定に，甘んじるべきではなかったと思います。

本来の紳士的なやり方では，陰で言いふらされた嘘に関して，最初に私のところに来て，少なくとも私の言い分を聞くのではないでしょうか。貴方が私を信じていたかどうかにかかわらず・・・。デービッドソン氏は貴方に何も言わなかったが，貴方は単に自分自身の評価に利するように委員会に提示したに過ぎないと，私には考える権利があります・・・・。

調査委員会はその月末に調査結果を発表して，技術者達の潔白は証明され，ローブリング社も同様であった。それら全てが，不適切な誤解であったとの説明であった。ローブリングの指示で，ペイン大佐は，アンドリュー・クロマンというカーネギーの元冶金学者と一緒に，しばらくの間ピッツバーグに滞在していた。当時，その冶金学者は，自分で独立して事業を行っており，ミズーリ州グラスゴーでウィリアム・スーィ・スミス将軍の新しい鉄道橋用の鋼材を製造していた。その橋は，鋼材だけで建造されたアメリカでの最初の橋梁であった。クロマンは，鋼製アイバーの新しい製造方法を所有しており，ペインはピッツバーグに行き，その製造過程を研究していた。

ペインがクロマンを優遇しているように見えたので，このことから，贈収賄の話が起こってきたのは明らかであった。

新聞は，全てのことが技術部門内で公正で整然としていたと伝え，市民を安心させた。事態は適切な方向に進んだ。しかしスローカムは，ローブリングにもペインにも，ローブリング社の職員やローブリングの弟達にも，決して謝罪することはなかった。ローブリングは，スローカムが行ったことを決して許さず，南北戦争の 2 人の元英雄の間の根深い憎悪は，些細な問題ではないことが判明した。

その後すぐさま，橋梁の理事達の交代，橋梁が始まって以来の初めての実質的な再編成が行われた。トーマス・キンセラは“出版事業に専念”するため再任を辞退し，数人の新顔を理事室で見かけるようになった。なお，彼らのほとんどが，架橋公社の規範によって，とても若々しい顔ぶれであった。また，更に注目すべき年配の理事の数人が話し始める時はいつでも，彼らが明らかに疑うような目付きとなることが，すぐに顕著となった。

新しい理事は，次のような人々であった。ウィリアム・G・スタインメッツ，ブルックリン市の会計監査官に就任した時点で自動的に理事となった。彼の職業は技術者でドイツ生まれ，ふさふさで乱れた黒髪の頭で，片足は木製の義足であった。ブルックリンのアルフレッド・C・バーンズ，書籍出版者の A・S・バーンズの長男で共同経営者，ある説明では「その市の中では，最も教養があって愛想がよい紳士の 1 人」であった。エドワード・クーパー，ピーター・クーパーの息子でエイブラム・ヒューイットの義理の兄弟であり，ニューヨーク市長であった。ロバート・B・ルーズベルト，裕福なニューヨークの弁護士で，活動的な政治改革運動家で，有名なスポーツマンであった。彼のお気に入りの甥セオドア（後のアメリカ大統領）は，その当時ハーバードの最終学年であった。

4 人全員が，1878 年の選挙の結果として加わったものである。ブルックリンからの 2 人，スタインメッツとバーンズは共和党員であり，一方，クーパーとルーズベルトは民主党員であった。しかし，彼ら全員が評判のよい改革推進者であり，スタインメッツを除き，裕福で著名な父親の息子で，高等教育を受け，都会風で，公共心があり，政治面でも大望を抱いている紳士であった。彼らは政党名にかかわらず，キングズレーやスタラナハンよりも，お互いに多くの共通点を有していた。キングズレーやスタラナハンは，いわば田舎生まれで都市と共に成長し，一世代を自力で立ち上げた男達であり，若い理事達が気づいていたように，成長の途中のどこかで，年配の人々が人間の弱点と呼んでいるものに対するふとどきと思えるような忍耐力を身につけていた。

新しい理事達は，状況を正常な状態にしようと決心していた。しかし，最初から，おおげさに騒ぎ立てたのはスタインメッツであった。一例をあげると，すぐに彼はキングズレーの解任を要求し，それに対して何のためらいもなかった。ブルックリンの会計監査官から見れば，キングズ

レーは旧体制の中心人物であり，橋梁建設に極めて長い期間を要している理由は，旧体制の誰もがそれを望み，状況を迅速に進める術を知らないからであった。どちらにしても，キングズレーは，もはや理事として残れる可能性はなかった。

だがスタインメッツは，その建設業者が持っている力を著しく過小評価していた。ブルックリン市長のハウエルは民主党員で，おそらく数えきれないほどキングズレーに恩義を受けており，その市長が，キングズレーは留まることになるだろうと発言した。その結果，ヘンリー・マーフィーが，その替わりに一時的に解任させられた。マーフィーは解任されるとすぐに，その攻撃をとても寛大に受け入れ，他の理事が辞任するより自分が背負ったことを記者に丁寧に語り，当然の結果として復職することになった。再任後すみやかに，他の人々は，再び理事長としてマーフィーに投票し，副理事長にはキングズレーが選ばれた。それら全ての事が，せいぜい短気で興奮しやすい程度の人物である会計監査官のスタインメッツを無視して進められた。そのような状況から，激怒した彼は，記者が彼の意見を取材にきた時には，かろうじて話すことができたくらいであった。

しかし，スタインメッツはその夏の間中，攻撃を強行し続け，秋になると，坩堝鋼に対するあらゆる古い議論を持ち出して，上部構造でのベッセマー鋼の使用に反対し，最低価格応札者のエッジ・ムーア鉄鋼会社との契約に反対した。そして大抵の時には，彼と同時期に理事に加わった他の青年達に選択の余地を与えることもなく，逆に反対する側に立たれるなど，かなり愚かで面倒な状況であった。新しい理事達は，問題点を取り除くことには，確かに熱心であったが，争い以上のもっと重要なことを探していた。

しかし 12 月，まさに 3 年前に起こったと同じような世間を驚かす橋梁災害が，粗雑な鋼と不十分な技術に関するあらゆる風評を，促進させたようにも思われた。1879 年 12 月 28 日，スコットランドのテイ湾に架かるテイ橋（**図-21.5**[9]），世界的にも最大級で大変有名な橋梁が，強風で破壊されて，75 人の人々が乗っていた列車と共に海の中に崩れ落ち，全員が死亡した（**図-21.6**[10]）。その橋梁は，英国の第一流の技術者で，偉大なスティーブンソンの弟子であるサー・トーマス・バウチの作品であった。バウチは，ヘンリー・ベッセマーと共に，その年の 6 月にビクトリア女

図-21.5　初代のテイ橋（撮影 1878～1879 年頃）

[9] https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Original_Tay_Bridge_before_the_1879_collapse.jpg （参照 2016-07-29）
[10] https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Fallen_girders,_Tay_Bridge.jpg （参照 2016-09-25）

図-21.6　テイ橋の落橋

王からナイトの称号を授けられていた。しかしながら，彼の橋梁，一連のトラス橋梁は，鋼ではなく，主として錬鉄で製作されており，その後の事故調査報告では，風荷重を適切に計算していなかったことが示された。その結論は，主として技術者に責任があったということであった（バウチは，その苦難によって，健康と精神を病み，1 年も経たずに亡くなった)。

当然のことだが，その大惨事のニュースは，ニューヨークとブルックリンで大きな物議を巻き起こした。マクナルティとペインは，新聞紙上で長々と取材を受け，イースト川橋梁が全く異なる種類の構造物であることを説明して，一般読者を安心させるために最善を尽くした。だが発言すべきは誰だったのか？ 不幸をもたらしたバウチの言葉は，専門家のどのような言葉よりも，尊重されなかったのではないか？

奇妙な巡り逢わせだが，テイ橋の話題を掲載した同じ新聞が，有名な素線製造業者で，巨大なケーブル用の素線を供給した J・ロイド・ヘーグが，まさに倒産したことも報じた。そして，1 件の更なる破滅的な注釈を加えるように，さらに別の“著名な技術者”は，イースト川橋梁はその上に積載すべき重量の 1/5 も支えることができないだろうと，主張し続けていた。1880 年元旦の新聞の大見出しは「テイ橋の大惨事が，ニューヨークとブルックリンの間で繰り返されるのだろうか？」と提起し，新しい 10 年が始まった。

1880 年の新年早々の数週間，エミリー・ローブリングは，主ケーブルとハンガーロープの間で作業をしている小さな人形のような作業員の姿を眺めながら，テイ橋の悲劇について考え，窓際に一人で立っているような時間があったに違いない。その頃の彼女は，考慮すべき無数の項目と，必要となるあらゆる計算項目のとても重要な信頼性を理解するほど，十分な知識があった。彼女は，とても多くの項目が，どのように誤った方向に進む可能性があるのかを，十分に理解していた。一部の人が言っているように，イースト川はテイ湾ほど風が強いわけでもなく，海に向かっ

て広く開いているわけでもない。それでも川には塩水が流れ，ロングアイランドが防風の役目をしているにもかかわらず，川の上では，風が吹き荒れていた。新聞によると，テイ橋が落橋した時，列車は，ほぼ 90 フィート（27m）落下したようである。

だがその同じ週の間に，彼女は，何年振りかに自分の気持ちを高揚させながら，家の周りを歩き，雪に覆われたハイツの街路を馬で走る時もあったに違いない。12 月に，G・K・ウォーレンが要請していた委員会での審理実施が，ファイブフォークスの戦いから 14 年 8 ヵ月後についに承諾された。

1880 年 2 月下旬，彼女は自分のスクラップブックに，フェルディナンド・デ・レセップス[11]がシルクハットでオーバーコートを着ている大きな挿絵を貼り付けた。挿絵の見出しによると，レセップスが，ニューヨーク側アンカレッジの頂上で，橋梁を視察するグループと一緒に立っている挿絵であった。その“偉大な技術者”（そもそも彼は技術者ではなく，外交官であった）は，彼の経歴での偉業となるパナマのイスマスを横断する海水面運河を推進するために，フランスから到着したところであった。別の週には，彼はアメリカ土木学会（聴衆の中にはコリングウッドとマクナルティもいた）で熱のこもった演説を行ったようである。また，レストランのデルモニコスでの豪華な晩餐会では，大歓迎されたようである。この晩餐会では，ブルックリンの牧師であるリチャード・ストーズが歓迎の挨拶を行い，エミリー・ローブリング自身も，デ・レセップスが晩餐会に堂々と登場した際に同行した女性達の中に入っていたようである。祖父のようなフランス人は，橋梁に大いに感動したと記者に語っているが，エミリーが保管していた挿絵では，彼は一番目立つ位置にいる身元不詳の若い婦人に，もっと興味を持っているように見える。

スクラップブックに綴じ込まれたフランク・レスリーズ・イラステッド新聞の全面には，作業員達が主ケーブルの一本に鉄製の吊材バンドを取り付けている詳細な風景が掲載（**図-21.7**[12]）されており，これらのワイヤーロープの吊材（ハンガーロープ）で，道路部分の鋼製床組が支持されることとなる。ケーブルは，この時までに，端から端まで完全に被覆されていた。一旦，吊材が所定位置に配置されると，作業員達は床組の横桁を並べ始めることができた。その作業は，アンカレッジと主塔に最も近い位置から始められた。最も近い吊材だけを主塔側に引き込み，横桁を取り付けてから，所定位置に戻すだけであった。横桁の上には厚板が敷かれ，その上に作業員が載って，次の横桁を架設するという方法で，河川上まで張出して施工が進められた。一旦，鋼製床組の組立てが始まると，彼女は，夫から指示されたように，その状況を確認するために，自らその上を歩いて出て行けるようになった。

4 月に，彼女は聖アン教会に関する 2 件の記事を切り抜いている。その場所は，11 年前にローブリングとペインが，中心線を見通すために利用した場所であった。歴史的な古い建物は，まさ

[11] フェルディナンド・デ・レセップスは，フランスの外交官・実業家でスエズ運河を建設した人物。
[12] Frank Leslie’s Illustrated Newspaper’s view of cable work : November 15, 1879.

に取り壊されようとしており，イーグル新聞は「近代的な改修の推進によって一掃」と報道している。

彼女のスクラップブックは，市民が橋梁を眺めたように，その年の橋梁の全てを物語っている。そこには，財源に関する通常の論争，ちょっとした 1〜2 件の事故，鋼の契約に関する多くの泣き言や釈明（エッジ・ムーア製綱会社の納入には腹立たしいほどの遅れが発生していた），工事の進捗状況の定期的な報告（例えば，ニューヨークのウィリアム通りと北ウィリアム通りを跨ぐ大きな斜めアーチや，吊橋の床組の円滑な進捗状況に関するもの）が残されていた。郵便切手ほどの 1 件の小さな切り抜き記事には，ブルックリンの J・ロイド・ヘーグが，シンシン刑務所で岩石を割っていることが掲載されている。彼は，不渡り小切手を出して有罪判決を受けていた。

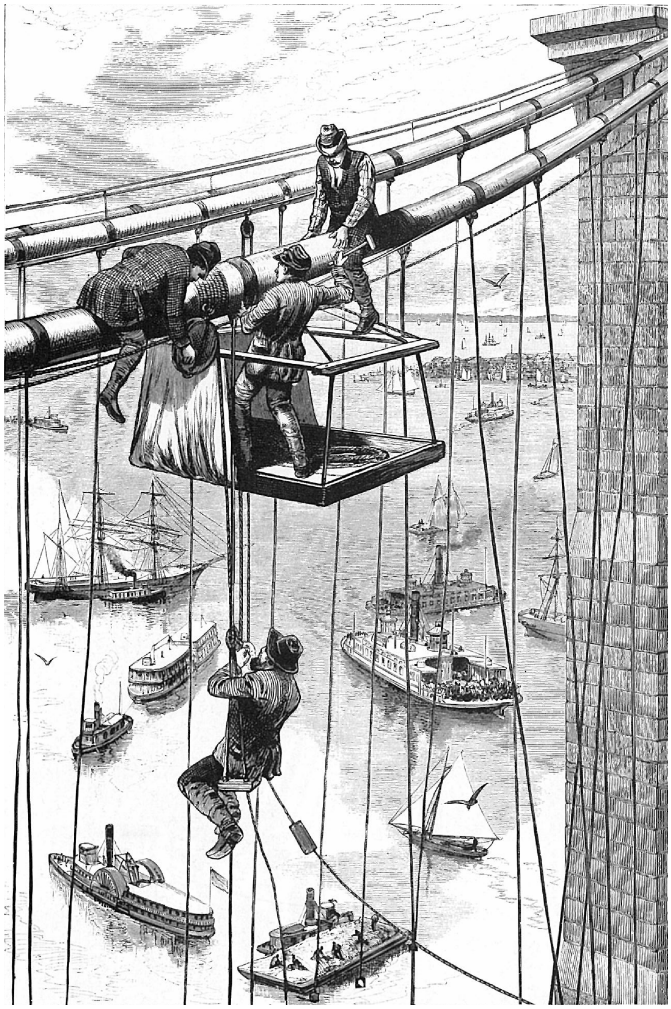

図-21.7　ハンガーロープ取付け作業

6 月，ヘンリー・マーフィーは，2 人のプリマス教会音楽家に，橋梁の支間中央の仮設架台へ，彼らの小冠を持ち出しても構わないと発言した。そして，その音楽家は，その場所で，フェリーボートとフォール・リバー船ニューポート号から，上を見上げて歓喜する数百人の人々に向かって，“我が魂を（讃美歌 273 番）”，“千歳(ちとせ)の岩よ（讃美歌 260 番）”，“あめつちこぞりて（讃美歌 539 番）”を演じた。

その年の夏と秋は概して平穏無事で，1880 年 10 月の理事会で起きた 1 件の信じがたい場面だけが，ブルックリン全体の話題となった。

会議は決まりきった事項だけが議題であり，ほぼ閉会となる頃，会計監査官のスタインメッツは，理事長に伝えたい情報があると発言し，そこですぐに理事長のヘンリー・マーフィーに，著しく長い印刷された文書を手渡した。そして使者が部屋に飛び込んできて，出席者全員に補足的な写しを配布した。ウィリアム・キングズレーは，ゆっくり立ち上がり，その写しを広げて，それをテーブルに出すために移動した。

キングズレーは「このような人物が，こんなやり方で情報を提示するとは，理事会の威厳に対

する侮辱である」と発言した。

スタインメッツが興奮して「議長，議長！ 私の情報を読んで頂くことを要求します」と怪しげな英語で叫んだ。キングズレーは「私が話をする番であり，スタインメッツは常軌を逸している」と言った。

キングズレーが「この人物は，この理事会のメンバーになって以来ずっと，一件の実用的あるいは理知的な考えも提案することもなく，まさに先ほどのような人気取りのくだらない資料を，理事会に絶えず持ち出している」と発言した。

スタインメッツは「だが，その資料は，まだ読まれていない」と抗議した。

キングズレーは，会計監査官を睨みながら，大声で「君は，自分が政治活動のスラム街にいるのではないことを理解する必要がある」と大声で言った。

スタインメッツが抗議を続ける一方で，その文書をテーブルに出す動きが，素早く進められた。彼は「私は，ブルックリンの住民を代表している。私が普通の市民であれば，ここにいることはない。・・・キングズレー氏の提案は，いつも耳を傾けられ受け入れられている。一方，私の提案はそうではない」と叫んだ。

キングズレーは，スタインメッツの印刷された書簡を振りながら「これは，全く馬鹿げた話だ。それは，理事会に持ち込まれた選挙区の政治活動である」と言い返した。

マーフィーは，すぐにその問題の更なる議論を中断させ，別の事案を取り上げた。しかし，会議が閉会となった時，キングズレーはスタインメッツに向かって行った。その時，スタインメッツは，隣の事務室で他の人々に囲まれて立っていた。

キングズレーは，自分より頭一つ近く小さいスタインメッツに向かって「君は，扇動家の役を務めている。君は，何をあるいは誰を，代表しているのか？」と言った。

そのグループの中の一人によれば「キングズレー氏の態度は，むきになっており，スタインメッツ氏と向かい合って立ち，じっと睨んでいた。スタインメッツが青ざめ，理事会の他のメンバーが部屋の中に押し寄せてきた」とのことであった。

スタインメッツが「私は，ブルックリンの人々を代表している」と答えると，
キングズレーが「君は，誰も代表していない」と反論した。
スタインメッツが「貴方は，紳士ではない」と言うと，
キングズレーが「君は，ならず者である」と言い返した。
「私は会計監査官であり，ブルックリンの住民を代表している」

「言っておくが，君は誰も代表していない。まったく誰も」
スタインメッツは「ええと，キングズレーさん，貴方にそのように受け取られても，かまいません」と後ずさりながら発言した。
キングズレーが「もちろん，そうだろう」と答えた。

続いて，スタインメッツは，キングズレーに背を向けて部屋を出て行ったが，その後もキングズレーは，憤り続けていた。

その話は全て，夕暮れまでに街中に知れ渡った。スタインメッツは，キングズレーに殴られる恐れがあったと，後で述べたが，その部屋にいた誰もが，それに同意することはなかった。しかし，理事会の誰もが，キングズレーの態度を正しいとすることはできず，新聞はスタインメッツが障害者であるという事実を強調した。キングズレーが所有するイーグル新聞でさえ，スタインメッツの書簡を読んだ方が良かったと認めていた。そのようなことから，全体的な状況は，しかるべき状況よりも更に大げさなことになってしまった。あらゆる夕刊紙が，スタインメッツの書簡の全文を掲載した。一時的な興味以外に，本来ならば関心を呼ぶような内容は，ほとんど無かった。スタインメッツは，主として鋼の契約に関して多くの的外れの告発を行っており，それを裏付けるものは何もなかった。数人の社説担当記者は，それを額面通りに受け取り，その結果として若干の愚かな非難記事を書いたものの，全ての問題はわずか数日でおさまった。

それでもなお，理事会室での衝突は，理事会での多様な人格の間に激しい感情が生まれていることを示していた。そして，ローブリングは生涯の後半になって，彼の妻が橋梁建設でどのような役割を果たしたか尋ねられた時，最高に称賛したことは，これらの理事達に囲まれて，このような特殊な年月の間における“調停者としての彼女の驚くべき才能”であった。彼は，いつもの感情を表に出さない控えめな表現で，彼女がどのようなやり方で“機転をきかして個人の摩擦を取り除いた”か，“その対応において若干の政治的な活動の中に必然的に内在している”難点を丸く収めることができたかを，人々に語った。

明らかにその仕事に関わったほぼ全員が，彼女に対して，各自の政治感・職業・年齢・彼女の夫に対する特殊な感情にかかわらず，とても好感を持っており，大いに尊敬していた。彼女が関係者の間で歓迎され，彼女の意見がとても尊重されたことは，女性が建設の仕事に参加したり関わったりすることが，特別な機会の見学者を除いて，絶対に前代未聞であったその当時では，そのこと自体が注目に値する証言であった。

彼女が何度乱れた気持ちを鎮めたのか，彼女が何度論争の一方の言い分を，その次に他方の言う分を根気よく座って聞いたのか，彼女が何度適切な忠告の言葉を，ヘンリー・マーフィーやフェルディナンド・ローブリング，C・C・マーティンに，彼らが夫の病室に入る前にかけたのか，彼女自身が直接，どの程度頻繁にスタインメッツやキングズレーを相手にしたのか，記録には残っていない。しかし，彼女が実際にまさにそのような仕事で非常に忙しかったという印象がある。ローブリングは，彼女の役割を“計り知れぬほど貴重なもの”と述べていたようである。

1881 年 2 月には，ヘンリー・マーフィー，ジェームズ・ストラナハン，牧師のストーズ博士が正装し，マーティン，コリングウッドと 3 人の若いレンセラー工科大学の卒業生で最近雇用したアシスタントを連れてニューヨークに向かい，その有名な工科大学の同窓生の集会に出席した。コリングウッドがその晩の主要な講演者であり，主題はその橋梁に関するものであった。マーフィーとストラナハンは架橋公社の代表として招かれていた。またストーズは，このような機会での常連のようで，厳粛に見える技術者達に対するある種の非公式の牧師のように思われる。この大学の同窓生は，神が創造したものの改善について大変冷静に話をする人々で，南北戦争以降，どんな軍隊よりも国の様子を，既に変えてしまった人々であった。

その夜の講演では，その工科大学が 55 年間に世界中に送り出した 739 名の技術者達によって完成したもの，すなわち彼らが建設した無数のダム，運河，橋梁，鉄道や水道について，多いに語られた。しかしながら，全ての話題の中で最も力強い証言は，トロイ出身のグリーン教授によるもので，イースト川橋梁がレンセラー工科大学出身の人々による仕事であると，さりげなく言ったことであった。それは全体としては正しくなかったが，教授の話を聞いている人々は，非常に喜んでいた。

コリングウッドは，少し長すぎるほど，橋梁に投入してきた煉瓦，石材，鋼材および鉄材の途方もない量について話し，その後，大きな拍手に向かって，作業がほぼ終わりかけていると発表した。彼は「本当の英雄はローブリングであり，橋梁への影響力を失うことは全くありませんでした。・・・工科大学から，この橋梁にやって来た仲間は定着しており，素晴らしい粘り強さを身につけたようです」と述べた。

その後に続いた晩餐の間，技師長について多くの話題がでており，明らかにほぼ同じくらい，技師長の妻の話題も出ていた。なお，その頃には，彼女はアシスタント技術者から心酔されるような人物になっていた[13]。

1881 年の春には，鋼製床組の架設（**図-21.8**[14]）が前方に進み始め，巨大な構造物は，橋梁らしく見え始めた。夏までには，供給面で遅れが出ていた請負人があっても，上部構造は川の上に向かって，両方向から順調に進んでいた。河川上の船の上から建設状況を見学した後，感心した技術者の一人は記者達に「あのような橋梁の架設方法は，巨大な金梃子のようにしっかりしており，

[13] 実際に，彼女に関しては多くの話題が残っている。1 年後の次の同窓生の集まりで，ロシター・W・レイモンドというブルックリンの技術者，RPI の卒業生ではなかったが，晩餐の後の話題提供者となるほど知られていた人物は，彼女の事について話題提供し，特別な乾杯の音頭を取るように依頼されたほどであった。（レイモンドは，かつてプリマス教会でビッチャーの跡を継ぐよう要請されて，その要請を辞退したほどの仰々しい講演のやり方をする人物であった）。彼は，静まり返った聴衆に向かって「皆さん，私は，ある女性の名前を公共の場で軽々しく口にすべきではないと認識しています。・・・しかしながら今，皆さん全員の唇から半分ほど口に出されようとされているもの，ワシントン・ローブリング夫人の名前を私が口にするとき，私に思いやりや畏敬の念が欠如していることを，お許しいただけると，私は信じております」と演説した。

[14] http://www.engineersjournal.ie/2015/04/21/brooklyn-bridge-construction/ （参照日 2016-07-31）

図-21.8　床組の架設状況（撮影 1881 年）

千年は存続するであろう」と語っている。その夏は，第 20 代アメリカ合衆国大統領のガーフィールドが暗殺され，チェスター・A・アーサーが第 21 代アメリカ合衆国大統領になった時期であった。なお，アーサーは，橋梁建設の初期段階には，ニューヨーク港の税関長であった。

税関のドーム屋根は，ワシントン・ローブリングが，自宅の 2 階の窓からとても簡単に認識できるニューヨークのランドマークのひとつであった。彼が展望できる世界は，彼がハイツの自宅に戻った 1877 年の夏以来，ずっと同じであった。この 4 年間，ニューヨーク市街や橋梁の眺めだけが，彼が展望できる世界であった。

バッテリーからニューヨーク側主塔まで，最もよく知られたランドマークの全てが，定規に沿った点のように立っていた。古いトリニティ教会の尖塔は，ダウンタウン[15]で最も高い建物であった。そして，その右手側の更に遠くのアップタウンには，ウエスタン・ユニオン・ビルの塔があり，その建物は，彼の自宅とフルトン・フェリーのニューヨーク発着場を結んだほぼ直線上に建っていた。そして，国旗を掲げた重厚な駒形屋根の郵便局が続き，ジェームス・ボガーダスによって 30 年前に建設された鋳鉄利用の先駆けとなったショット・タワー（大砲の着弾を確認する展望塔）があった。そのちょうど右手，橋梁の主塔の手前には，先の鋭く尖った時計台のあるトリビューン・ビルがあった。彼の双眼鏡や望遠鏡で，トリビューンの時計で時刻を確認することが

[15] ニューヨークのダウンタウンとは，マンハッタン島の 14 番通より南側の区域を指す。

可能であった。

望遠鏡を通して，ニューヨークの建物側面に種々の色で大きく書かれた，イブニング・ポスト，・・・アーベントロート・ブラザーズ，プランバー・アイロン・エナメルド・ウェア，ホーム・フォー・ニューボーイズ・・・等と読み取れる多くの建物があった。ローブリングは，年々着実に変化し，いつも少しずつ高くなって行く地平線を眺めて続けていた。それでも，橋梁の花崗岩製主塔は，完全に主導権を握っていた。トリニティ教会とトリビューン塔は，実際に測れば 1 フィート数インチ程，橋梁の主塔より高かったが，そのようには見えず，はるか遠方にあり，主塔に比べれば空に対して単なる針のようであった。

ローブリングの部屋の窓から，橋梁の両側の主塔とも，はっきりと見ることができた。実際に，橋梁のほぼ全体構造を見ることができ，ニューヨークのハーレムとブラックウェル島（現在のルーズベルト島）を半球形にしたような空の部分に輪郭を見せていた。あまり意味のないことだが，彼の望遠鏡は，上部構造に打ち込まれているまさにリベットを調べることができるくらい強力なものだったと言われている。だが橋梁は，彼が進行中の様々な状況を見るには，確かに十分に近いところにあった。興味深いことに，彼は，実際に望遠鏡を通して橋梁を熟視し続けることはほとんどなかったと，後に彼の妻が述べている。物事が適切に処理されていれば，彼の“経験豊かな目”で一瞥すれば十分であったと，彼女は述べている。どうやら，彼の視力障害は，近くのものを見ることに限定されていたようである。

秋になると，C・C・マーティンが「橋梁は，来年の夏には完成するだろう」と言うようになった。初雪が舞う頃には，鋼製梁とハンガーケーブルが，主塔から主塔までの全区間で吊り下げられた。12 月初旬，エミリーには，とても長い間で，初めて達成感を味合う瞬間があった。おそらく，技師長は，自宅の窓から式典全体を眺めていたはずである。

その日の昼過ぎ，彼女は自宅を出て，直接ブルックリン側主塔の下部に馬車で出向いて，ファリントンに付き添われて，橋梁上の道路面まで螺旋階段を登っていった。彼女が待っている時に，微風が吹いていた。外気は雨の香りがして，まるで 4 月のように穏やかであった。

ほどなく，理事会の代表団が下側の作業ヤードに到着して階段を登ってきた。そして，シルクハットを少し持ち上げて，彼女と握手をし，思いがけない天候について意見を述べたが，それまで行っていた会議での話題については何も言わなかった。橋梁事業が始まって以来の大変重要な会議の 1 つであることは，彼女も認識していた。だが彼女も理事達も，それについて何ら触れることはなかった。

そして，彼らは出発し，鋼製上部工の上に設置された厚板の歩道に沿って歩いて行った。その時の厚板の歩道は，わずか 5 フィート（1.5m）にすぎない幅で，河川上の全長に渡って伸びていた。その感覚は，キャットウォークの上より，明らかに少しだけ，神経を擦り減らさなくてもよいことであった。

彼女が先導するように前方を歩き，ブルックリンのハウエル市長と，裕福な蒸気船の船主でニューヨークの新市長となったウィリアム・R・グレイスの傍に付き添った。他の人々，アシスタント技術者と 2〜3 人の記者の総勢 12 人程が，その後に続いた。絶叫するような眺望であった。強風が吹いており，ある記者は，高齢で尊敬されているジェームス・S・T・ストラナハンの白く長い髪の毛がどのような状況になっているかを書きとめた。あちらこちらで，カモメが大きな弧を描いて，主ケーブルやステイケーブルを越えて滑空して，橋梁の下側に舞い降りて行き，白く小さくきらめきながら河川の濃い緑灰色に向かって，更にずっと下まで舞い降りていった。船舶は，白い帆を詰め開きにして，その下方を通過していった。風や，両方向から押し寄せる船の進む波や，激しく動いている潮流の影響を受けて，河川の水は渦を巻き，大きな乱流となって回っていた。その小さな行列の中では，とても活気のある会話が行われていた。誰もが，実際の道路部分を通って，橋梁を初めて渡るという素晴らしい時間を，満喫していた。

彼らがニューヨーク側主塔に到着すると，数本のシャンパンが開封され，理事達は，ローブリング夫人の健康と“事業全般の成功”を祈念して乾杯した。